

はしがき

国内の高等教育における日本語教育の歴史をふり返ると、まず国費留学生、または高い日本語力を持ち、自律的に留学生活を送ることができる少数の留学生のみを迎えていた時代が長く続いていましたが、1995年ごろから、留学生10万人計画に応える形で半年から1年の交換留学生の受け入れが盛んになって、大学で単位認定を行う日本語科目が初級レベルから整い、多様な文化・社会背景を持つ留学生に対する日本語教育が広く行われるようになってきました。その後、数週間という超短期の受け入れプログラムが各大学で展開されるようになり、現在は日本語教育プログラムの機能が多様化しています。

本学の場合、2014年度以降、スーパーグローバル大学創生支援事業に鋭意取り組んでいるところで、日本語教育センターは留学生にも日本人学生にも有意義な国際化に貢献する形を模索しています。

本センターが思い描く「留学生にも日本人学生にも有意義な国際化」に資する日本語教育は一樣ではなく、学生の受け入れ部局である学部、研究科の多様なニーズに応じて展開するもので、かつプログラムの目標の確認とフィードバックが学部、研究科と相互に行えるものです。この思いから、今回の日本語教育センターシンポジウムは、「大学の国際化と日本語教育—発展的で持続可能な学部・研究科との連携を目指して—」というテーマで企画をしました。

シンポジウムは2部構成とし、第1部は、東條吉純氏（日本語教育センター副センター長、法学部教授）に「留学生2000人時代に向けての日本語教育センターの課題」という題目で問題提起を行っていただき、4つの学部・研究科から日本語教育センターとの連携の例をご報告いただきました。その後スコット・デイヴィス氏（経営学部教授）による「国際経営学研究科との連携の可能性と課題」、山中伸彦氏（ビジネスデザイン研究科・経営学部准教授）による「ビジネスデザイン研究科との連携の可能性と課題」、豊田三佳氏（観光学部教授）による「『言語と文化現地研修』プログラムにおける日本語教育」、そして池田伸子氏（異文化コミュニケーション学部教授、前日本語教育センター長）による「異文化コミュニケーション学部との連携の可能性と課題」がつづきます。第2部では、奥村隆氏（社会学部教授）、小澤伊久美氏（国際基督教大学日本語教育課程 課程准教授）からコメントを頂戴し、フロアを含めた全体討議を行いました。

当日は学内の教職員をはじめ、学生、学外の方々に、40名弱の参加があり、当日の参加者からはメッセージに富む問題提起と事例報告、率直な議論が高く評価され、本センターの取り組みに強い関心を寄せていただきました。本センターにとっては、「現場」への認識を新たにし、ミッションとパッションをもって新しい時代に臨む契機となる、意義深いシンポジウムとなったと存じます。充実した講演内容とともに、活発に議論が交わされた全体討議の詳細もぜひお読みください。

最後に、今回のシンポジウムでご登壇くださった東條吉純先生、スコット・デイヴィス先生、山中伸彦先生、豊田三佳先生、奥村隆先生、小澤伊久美先生、また「あとがき」をお寄せくださった山口和範先生、当日ご参加くださった皆様に厚くお礼申し上げます。また、企画・準備段階から本報告書をまとめるまでご尽力くださった日本語教育センターの皆様にご心から感謝の意を表します。

日本語教育センター長／異文化コミュニケーション学部教授

丸山 千歌